クザーヌスにおける否定性理解の究明へ向けて

――否定性の脱－基底（*Ab-grund*）――

長 町　裕 司

ニコラウス・クザーヌスの後期著作の内での『観察者の指針または非－他なるもの』（1462 年早春）では，とりわけ原理理論的（prinzipientheoretisch）な問いの考究と共に，その考察と密接に連関して重層的な否定性概念が刻銘に彫琢されてゆく。続く『知恵の狩猟について』（1463 年）は，アウグスティヌスの „*Retractationes*（『再考録』）“ にも比せられるもので，クザーヌスの生涯における神探求の歩みの 10 の狩猟場（campus）が再反省される。その中で〈非－他なるもの〉は，〈知ある無知〉〈可能現実存在〉〈光〉〈一性〉〈相等性〉〈結合〉等々と並んで確かに神探求のための卓越した狩猟場を成す名称の一つではあるが，言表しえない神へと向けられた上記のあらゆるエニグマ的名称がそれ自身として同定される制約として，顕現せざる形での先行性を示現する（*De venatione sapientiae*, n. 48; 59; 70; 71; etc.）。〈非－他なるもの〉の無条件に先行する絶対的原理性格をその否定的超出の構造へ向けて，（一）後期思索圏に参入する際の思想要因と構図について開明的叙述を提示し，（二）原理論的究明の組織的構造を問題化し，（三）〈non-aliud〉というエニグマ的表示による「超越する否定性」に透徹される二重否定構造の原理性を追究する。

（一）二つの前備的注記（Vorbemerkungen）

1) ‚directio speculantis‘ としての精神的境位について

クザーヌスの著作『非他なるものについて』のタイトル全体は，

‚*directio speculantis seu de non aliud*‘ に他ならないが，‚directio‘ の意味規定は「注意を向けること」「教導」という通常の意味使用から〈指針〉という邦訳を充てるのは先ずは的確であるが，‚speculans‘ としての精神的構えについては十全な究明を必要とする。先ずこの語は，‚speculum‘ また ‚speculateo‘ と同じ語幹に属し，キリスト教的中世の伝統に則って「世界現実は神的なるものが映現する（relucere）鏡（speculum）」とクザーヌスにおいても理解されている[1)]。クザーヌスの先行著作群に属する〈無学者－対話（*Idiota-dialogus*）〉三部作の一つ『知恵についての無学者の対話（*Idiota de sapientia*, 1450 年）』では，「知恵は野外で，街路で叫んでいる（sapientia clamat in plateis）」のは，神的な知恵の〈如何なる限定をも脱する無限への動的な高み〉が世界現実内部からの反照（＝知恵の叫び）を通して人間の精神にその実りの「前もっての味わい（味の予感 praegustatio）」を与えていること，〈知恵の狩猟〉へと駆り立てる神的真理への漸近的な接近路がそこから開かれていることを示している[2)]。中期の著作『神の視について（*De visione Dei*, 1453 年）』では，神へと呼びかけつつ観想（contemplatio）へと先導する枢機卿クザーヌスの言葉に，「あなたは私に度々現れて下さるので，その中に万物が映現するいわば生ける鏡のようにあなたにおいてすべてを観ているとあなたを認知する」[3)]とある。しかしむろん，この知の在り方は〈神の視〉それ自体なのではないことは，直後のテクスト脈絡が明示する。「私は今や鏡において，像において，エニグマにおいて永遠なる生を観想している」[4)]と表明される精神的境位が ‚speculans‘ に特有なのであって，この〈神へと不断に向かう探究の布置〉はその到達点である ‚visio‘, ‚intuitio mentis‘ とは明確に区別されねばならない[5)]。『非－他なるもの』でも，精

1） Cf. *De non aliud* (h XIII), c. 8, p. 18, lin. 12–13: „ ... quae sic et sic relucet in speculo et aenigmate, ...“; ebd., c. 20, p. 49, lin. 18–27.

2） *Idiota de sapientia* (h V), p. 11, lin. 3–11.

3） *De visione Dei* (h IV), c. 12, n. 48, p. 42, lin. 1–2: „Occurris mihi aliquando, ut cogitem te videre in te omnia quasi speculum vivum, in quo omnia relucent.“

4） Ebd., c. 4, n. 12, p. 16, lin. 4–5: „Contemplor nunc in speculo, in eicona, in aenigmate vitam aeternam, ...“

5） Cf. *De non aliud* (h XIII), c. 19, p. 46, lin. 9–13: „Omnia enim, quae oculi mentis acie non videntur, sed ratione investigantur, tametsi verum admodum appropinquare videantur, nondum tamen ad ultimam certitudinem pervenerunt. Ultima autem et omni ex parte cumulata certitudo

神の視によって接触する（visu mentis attingere）ことのできる「如何なる把握も如何なる表現さえも超え出る（supra comprehensionem , sic etiam supra expressionem）」圏域について，言表の適切さと厳密さを欠くという事態において観察する者（speculans）の境地が成立していることを述べている。それは,「精神をして形相化されないものを形相を通して観るようにさせる」ことに他ならない[6)]。但しクザーヌスは ,〈生ける鏡〉としての知性的精神を決して単に受容的に映しとる器のごとく理解しているのではない。〈無学者－対話（*Idiota-dialogus*）〉三部作の内の『精神についての無学者の対話（*Idiota de mente*, 1450 年）』においては，われわれにおける生ける知性的生命としての vis specularis について語られ，この力は精神の知性的鏡に映現するところのものを示すのみならず，常に同時に当の知性的精神が映現せしめていること自体も表出することが強調されている。映現内容と映現の遂行自体の映現の両契機によって，精神は生ける鏡となることができるのである[7)]。このように知性的精神は，エニグマ的にではあるが永遠の次元を映現する生ける鏡として，理性（＝推測・考察・媒介的論究を駆使する ratio）を十全に活用することにおいて決して任意性に陥ることはない。

2) クザーヌスの思考彫琢の組織法についての全般的注記

クザーヌスの《神探究》において，その思索の組織法には深部に至るまでの緊張を孕んだ両極性（Dichotomie）を成す双方向の統合が看取できる。一つの方向においての思考経路は,「現実態性（ἐνέργεια, actualitas）の原理に即しての存在者の〈根拠（ἀρχή）〉への遡源」として表示できる。クザーヌスも，アリストテレスによって確立され西洋

---

visio est.“

6）*De non aliud* (h XIII), c. 9, p. 20, lin. 1–2: „ ..., ita facit mens per formam videns informatum.“

7）*De mente* (h^2 V), c. 5, n. 86–87; cf. *De aequalitate* (h X/1), n. 9, lin. 8–9: „Anima [...] est notionalis ipsa veritas cognoscibilium [...]. Et per eam, quam in aliis comperit aliter, ad se revertitur, [...] in se quasi in speculo veritatis notionaliter omnia perspiciat et se rerum omnium notionem intelligat.“; *De venatione sapientiae* (h XII), c. 17, n. 50, lin. 1–6. 上述の問題脈絡について : Johann Kreuzer, *Der Geist als lebendiger Spiegel. Zur Theorie des Intellekt bei Meister Eckhart und Nikolaus von Kues*, in: Meister-Eckhart-Jahrbuch Bd. 4, hrsg. von H. Schwaetzer und G. Steer, Stuttgart 2011, S. 49–66, besonders S. 63 ff. のより詳細な考究を参照。

ラテン中世のアリストテレス受容の継承発展路線を踏襲するモチーフに依拠するのみならず，現実態の力動性構造から神的なるものの在り処を思惟する道を示唆している[8)]。但し，彼の思考境位は決していわゆる〈存在－神論（Onto-theologia）〉の枠組み[9)]に包摂されることなどはできない。存在するものの世界秩序の根源のみならず人間の希求目標として，クザーヌスの思惟の遂行にとっても神的なるものは，確かに一方では十全な完全性を表示し得る諸名称（概念）を通して「賛美／讃嘆され得るもの（laudabilia）」に他ならない[10)]。但し人間の希求／追求が究極的に志向する終極点は，自然本性的に組み込まれた前－述語的な方向づけの目標である限り，記述的に積極的内容を有する諸概念をもっての再構成は挫折せざるを得ないのである。それ故，希求し探究する人間精神には自らの圏域に包摂し得ないこの神的なるものを巡って，挫折からの栄光唱的（doxologisch）性格を刻印する神学的語りのみが確保されることになる[11)]。そこで，このように世界現実全体と人間の精神的営みの超越的根拠としての神的なるものは，その〈原理機能〉を洞察可能とした上で[12)]〈純粋現実態（actus purus）〉としても表示し得るが，実はその意味規定は〈現実態の現実態〉――クザーヌスが〈諸形相の形相〉〈諸本質の本質〉という表現によっても主題化する[13)]――としてのみ理解され

8） とりわけ *De docta ignorantia II*, c. 8; *Trialogus de possest* (h XI/2), n. 6–7; *De venatione sapientiae* (h XII), c. 13, n. 36 を参照。

9） 西洋形而上学の存在–神–論的体制（die onto-theologische Verfassung der Metaphysik）を開明したのは，中期（1930 年代後半）以降のハイデガーであった。存在するものを存在するものである限りにおいて究明する「存在（者）論理学（Onto-logik）」は，同時に全体における存在者そのものを根拠づける「神的なるものの論理学（Theo-logik）」であり，両者の統一は存在者の存在として思考されている（GA 11, S. 66）。ハイデガーは，確かにアリストテレス由来に関する限りでは，西洋近代に至るまでの形而上学の根本体制を〈存在–神–論〉として正当に看取したと言える。

10） 特に *De venatione sapientiae*, n. 51; n. 105; etc. を参照。

11） この解釈方向に関して以下を参照――Christian Ströbele, *Konstruktive Vernunft und göttliche Namen. Transformation der Lehre von den göttlichen Eigenschaften bei Cusanus und Schleiermacher*, in: T. Müller/M. Vollet (Hrsg.), *Die Modernitäten des Nikolaus von Kues. Debatten und Rezeptionen*, Bielefeld 2013, S. 323–344; S. 336 f.

12） Cf. *De princ*. (h X/2b) n. 33, lin. 2–7: „Infinitas finiens est finis, cuius non est finis, et est principium per se subsistens omnen finem complicans et est deus ante omne ens.“

13） *De non aliud* (h XIII), c. 10, n. 37; n. 40――アリストテレス *De Anima Γ*, 432 a 2 に由来する「諸形相の形相（forma formarum）」は，「存在の形相あるいは絶対的に最大の現実態的存在性」（*De docta. ignorantia* I, c. 23）「存在者すべてに存在を与える」（II, c. 7）と述べら

ねばならない。「純粋現実態は，なおより一層純粋な現実態を経てその現実態に到達したということにはならず，［…］より一層やより大とかを許容する事物においてはこの最も卓越せる現実態へは決して至り得ない」（*De non aliud* (h XIII), prop. 17）のである。ここに絶対的なるものの超越的否定性と原理機能性格とのパラドックス的関係が現出してくる。尤もこのパラドックスの解消こそは，絶対的原理の否定動態を表示する ‚non-aliud‘ というエニグマ的名称に卓越して課せられていることが洞察できよう。従ってもう一方の思考理路としては，〈超越してゆく否定性〉が問い究められる方向である。但し以下に見るように，この〈超越してゆく否定性〉自体がクザーヌスの諸テクストにおいて主題的にそれ自体として論究されているとは言えず，先ずは彼に特徴的な精神形而上学的問題構制を〈観察者（speculans）〉の立場から思索的に透徹することから始めねばならない。

（二）問題としての〈他性（alteritas; alietas）〉— universum における世界内部的存在者の刻印 — と〈非他なるもの（non-aliud）〉と表示される絶対的原理性

クザーヌスによる〈世界像〉の彫琢をその全体性と複合せる諸観点において問題化することはここでの課題ではないが，世界秩序（*κόσμος*）を形づくる存在者についてのクザーヌスの最も基本的な規定として〈他性（alteritas; alietas）〉が先ず挙示され得るであろう[14)]。クザーヌスが独自に考案した〈神を真正に表示するための〉‚non-aliud‘ というエニグマ的名称も，（単に言語表現上の形式構造の問題としてではなく）有限なる世界現実への関連を保持しつつ差異性への脱去を指示する事態に留意しなければならない。初期著作においては確かに，可変性，数多性，分割可能性，運動性および不等性による区別が見出される存在するものの現実には必然的に〈他性〉が刻印されていることが強調されている[15)]。し

れており，「諸目的の目的（finis finium）」「限定する無限（infinitas finiens）」とともにクザーヌスの超越理解を形づくる重要な概念である。

14）　Cf. *De docta ignorantia* (h I) I, c. 7 ; II, c. 7.

15）　*De docta ignantia*. (h I) I, c. 7, p. 15, lin. 5 f.; lin. 20–22; p. 16, lin. 9 f.; *De coniecturis* (h III) I, 10, N. 44–45; *De mente* (h V) c. 6, n. 96, lin. 4–14.

かし他方，このような被造的存在者の相互の区別が他性に還元されるわけでもないことも後の著作では銘記されている[16)]。また，世界現実における厳密性は他性における厳密性であるので，神である真理性そのものを分有する程度に応じての厳密性であることも言及されている[17)]。他性とは，「神的な一性からの離反である」との理解も初期著作からして表明されている[18)]。他性は存在原理とはなり得ず，その基本的な欠如（privatio）性格の強調は，特に中・後期の著作において顕著となる[19)]。〈一性を在り処とする限りでの絶対者に関して他性は否定される〉というクザーヌスの思考要因[20)]は，マイスター・エックハルトにも見出される根本格率に他ならない。神の絶対的一性（unitas）には如何なる他性も区別も排除されており，その一性はエックハルトでは〈非差異化性（Ununterschiedenheit）〉として表示され得る[21)]。一性における存在論的充実（plenitudo）からの離反・喪失は，欠如化としての否定を意味し，被造的存在者が担うその否定相は「無の影を宿す」事態とも表現される[22)]。「……一性は何らかの形相的な光もしくは第一次的な一性の似姿であるが，他性は影であるか第一の最も単一なるものからの退きである」[23)]といったクザーヌスの言明も，エックハルトと共有されるプラトン主義的伝統に則ることが洞察されるが，その際神は最も上位の一性として「光の基盤としての源泉に他ならない」[24)]。但しクザーヌスは，「存在者は

16） *De visione Dei* (h VI) c. 14, n. 58, lin. 7–8: „Nec facit alteritas, quae in te non est, unam creaturam esse alteram ab alia, quamvis una non sit alia.“

17） *De coniecturis* (h III) II-1, N. 75, p. 19–21; N. 75, p. 19–21.

18） Cf. *De coniecturis* (h III) II, 2, N. 83, p. 2–3.

19） *De visione Dei* (h VI) c. 14, n. 58, lin. 15–17: „Non est autem principium essendi alteritas. Alteritas enim dicitur a non esse. Quod enim unum non est aliud, hinc dicitur alterum.“

20） *De Deo abscondito* (h IV) n. 12, lin. 3–6; *De visione Dei* (h VI) c. 14, n. 58, lin. 2–6.

21） Meister Eckhart, *In Sap*. n. 154 (LW II p. 490, lin. 7–8); cf. ドイツ語説教 Nr. 21 »Unus Deus et pater omnium, etc.« : DW I S. 363, Z. 7–S. 364, Z. 4.

22） Meister Eckhart, *In Joh.* n. 20 (LW III p. 13, lin. 11).

23） *De coniecturis* (h III) I, N. 41–42, 9: „ ... unitatem lucem quondam formalem atque primae unitatis similitudinen, alteritatem vero umbram atque reccesum a primo simplicissimo... .“

24） *De coniecturis* (h III) I, N. 42, 9: „ ... deus, qui est unitas, est quasi basis lucis.“ ――知性の観察（speculatio）に基づくならば〈一性から他性への運動〉とは他性における下位の（縮減的）一性としての宇宙が構成される〈一性と他性の交互的な透徹〉であることを Karl Bormann は指摘する : *Zur Lehre des Nikolaus von Kues von der Andersheit und deren Quellen*, in: Mitteilungen und Forschungsbeiträge der Cusanus-Gesellschaft 10, hrsg. von Rudolf Haubst,

如何なるものでも，どのように互いに異なって在ることができ，また互いに相異せるものとして他性なしに認識可能であるのか」と問い，「他性なしには概念把握できない。けれども他性は，積極的な原理ではない」と応答している[25)]。

人間の認識活動は他性の刻印の下での被造的現実から始動せざるを得ないが，他性は存在現実の原理ではない[26)]。神的一性に他性の場は存し得ないのみならず，現実態における存在現実を創出する創造に由来するとも生成の原理（生成可能 posse fieri）に属するとも考えられない〈他性の起源〉に関して，クザーヌスは他性の無（nihil）との関連を示唆し，「被造的存在現実が消滅するか或いは他のものとなるかは創造者に由来せず，［偶発的・付加的に］生じるのである」[27)]とまで言及する。以上，他性が成立する問題領野を診断したが，絶対的原理としての神を表示し得る〈非－他なるもの（non-aliud）〉はどのような圏域へと布置されるのであろうか。『非－他なるものについて』§6 の冒頭部で，最初の対話者であるアリストテレス研究家フェルディナンドゥスとの理性的精神に則った共同論究[28)]を通して，一定の帰結を総括している箇所を敷衍して解釈しておこう。

> 非－他なるもの（Non-aliud）は他なるものではなく，他なるものからの（他なるものから異なった）ものではなく（nec ab alio aliud），他なるものにおいて他なるものでもないが，それは非－他なるものが如何な

Mainz 1973, S. 130–137; S. 132. クザーヌスは，最高の一性原理として光源である神とそこから起源する光における映現として他性における世界現実を一元的に思惟する。

25）　*De visione Dei* (h VI), c. 14, n. 58, 10–12.

26）　Ebd., c. 14, n. 67, lin. 3–7: „Non est autem principium essendi alteritas. Alteritas enim dicitur a non esse. Quod enim unum non est aliud, hinc dicitur alterum. Alteritas igitur non potest esse principium essendi, quia dicitur a non esse. Neque habet principium essendi, cum sit a non esse. Non est igitur alteritas aliquid.“

27）　Cf. *Dialogus de ludo globi* (h IX) II, n. 81 p. 99, lin. 7–11: „Omnia creat deus, etiam quae alterabilia et mutabilia et corruptibilia; tamen alteritatem et mutabilitatem corruptionemve non creat. Cum sit ipsa entitas, non creat interitum, sed esse. Quod autem intereant aut alterentur non habent a creante, sed sic contingit.“

28）　侍医 Fernando Martíns de Roriz との対話進行がテクスト大半を占めるが，最終の対話者 Petrus Balbus Pisanus はクザーヌスの依頼で Proklos の *Theologia Platonis* を翻訳提供しており，当著作成立背景に新プラトン主義の諸著が属している。

る仕方でも他なるものではあり得ないという以外の理由根拠によるのではないからである（nec est in alio aliud non alia aliqua ratione, quam quia ‚non aliud‘ nullo modo esse aliud potest.）。あたかも非－他なるものにとっては，諸々の他なるものにとってと同様に，何ものかが欠けているようにも見えるであろう。他なるものとはすなわち，それを欠いているところのその或る何らかのものから異なってあるものなので，その欠いているところのものから他なるものなのである。けれども〈非－他なるもの〉は，何ものからも異なっていないのであるから，何ものも欠いてはおらず，またこの非－他なるものの外に［を超えて］何ものもあり得ることがないのである。（nec extra ipsum quidquam esse potest）[*De non aliud* (h XIII), c. 6, p. 13, lin. 25–30.]

〈非－他なるもの〉は，他なるものに対する対立においては位置づけられない。他なるものに対峙しての異他的なるものを非－他なるものが意味するのではない。ただし，非－他者が他なるものに対峙して他なるものではないことは，非－他者とは異他なるもの以外の何者でもないという可能性の排除に起因するのでもない。むしろ，非－他なるものは非－他なるものにおいて非－他なるものなのである[29)]。さらに非－他なるものという名称は，如何なる内実にも無条件に先行する（antecedat）絶対的原理性を端的に指示し，万物（omnia）とその規定にとってと同じく他なるもの（aliud）としての規定根拠（ratio）も先行的に非－他なるものそれ自体に依る[30)]。この原理論的脈絡は，概念的知の根本形式にとってその規定作用の基礎を成す定義（definitio）一般を可能にする制約が問われるのを端緒として，あらゆる世界内部的存在者の根本性格と成立（本質構成）の原理の基づけが開拓されてゆく。どのようなものが主語に立てられようと，X est non aliud quam X という定式が定義の基礎を成す限り，非－他なるものは定義する結合繋辞（copula）としてあら

29） Cf. Stephan Glotz, *Negationen des Absoluten: Meister Eckhart・Cusanus・Hegel*, Hamburg, 2009, S. 221f.

30） *De non aliud* (h XIII), c. 2, p. 6, lin. 20–22: „ Per hoc enim video ‘non aliud’ talia omnia antecedere, quia ipsa definit, et ipsa alia esse, cum ‘non aliud’ antecedat.“; ebd., c. 5, p. 11, lin. 18–19.

ゆる定義定式にも現れる。定義一般の定式表現としての „aliud est non aliud quam aliud.“ においては，非－他なるものは他なるものにおける他なるものである限りで自らを証示する[31)]。

定義一般を可能にする制約を問うことからの第一原理の論究は，‚non-aliud‘ という名称が以下の三様の絶対的原理性格を浮き彫りにする帰結へと導く――1)〈非－他なるもの〉によって表示されるところのものは，万物（omnia）にとっての「存在と認識の原理」として，絶対的なるもの（神）の「呼称し難い名称をより近似的・適切に彩どる」[32)]。2) 一（unum）・存在・真理・善といった超越論的名称（transcendentiae）（さらに永遠なるもの・無・非有等）は，非－他なるものが絶対的に先行しその後に続いて現れる（De non aliud c. 4 ; c. 7）[33)]。3) 非－他なるものは，一切の措定（positio）と止揚（ablatio 除去）に先んじて現れる[34)]。

以上でわれわれは, 非－他者の絶対的第一原理性が映現する（relucere）ことからの，《観察者の指針・導き（directio speculantis）》が定位できる上述の三様の現出境域にまで至った。この内の 3) に関して本稿では以下にその原理論的思考内実を主題的に追究し，絶対的原理の根本性格[35)]を究明しておきたい。その考究に先立ってクザーヌスは，すでに前述までの段階から一歩進んで，「それ故わたしたちは今，この原理そのものの展開された規定，つまり〈非－他なるもの〉は非他なるものに他ならない（non-aliud est non aliud quam non aliud）と考察することがふさわしいということを洞見しましょう」[36)]と言及する。非－他者として表示される絶対的原理それ自身は，自らへの自己関係における自己媒介的絶対性を開示するが，その際にこの絶対的原理の〈他なるもの（aliud）〉への

31）　*De non aliud* (h XIII), c. 21, p. 50, lin.10–11: „Quando autem dico : aliud est non aliud quam aliud, visum dirigit in ‘non aliud’, ut est in alio aliud.“; cf. *De venatione sapientiae* (h XII) c. 14, n. 41, p. 40, lin. 6–7.

32）　*De non aliud* (h XIII), c. 2, p. 6 lin. 26: „innominabile nomen Dei propinquius figulare.“――「認識の原理」であることについて : ebd., c. 8, p. 18, lin. 24–27; ebd., prop. 9, p. 20, lin. 29.「存在原理」については : ebd., c. 3, p. 5, lin. 27–p. 7, lin. 21.

33）　先－超越論的（vor-transzentental）な布置としての ‚non aliud‘ の絶対的超越性については，*De non aliud* (h XIII), c. 4, n. 13–14, p. 9, lin. 29–p. 10, lin. 29 においても示唆されている。*De venatione sapientiae* (h XII) c. 15, n. 43–n. 44, p. 42, lin. 8–23 も参照。

34）　*De non aliud* (h XIII), c. 4, p. 9, lin. 13.

35）　Cf. *De non aliud* (h XIII), prop. 5.

36）　*De non aliud* (h XIII), c. 5, p. 12, lin. 17–18.

関わりはこの絶対的原理の「非－他者－で在ること」に他ならない[37)]。問われ究思されるべきは，非－他者自身の自己定義的原理性の自己関係がどのように厳密に思惟されているかに焦点化される。一方では「他なるものにも数にも先立つ自己媒介的三一構造（unitrinum ante aliud tamen et numerum）として，「三一の秘儀，とくに神の贈与である信仰によって受容されたもの」へ向けてのクザーヌス独自の名称図式（一性 unitas，相等性 aequalitas，結合 nexus）を通して考察が展開される[38)]。然るに他方，非他なるものは「否定が肯定と対立しない唯一の場（campus）」（*De venatione sapientiae*, c. 14, n. 41, S. 40, lin. 8）として見いだされるのならば，措定と除去に関しても「相対立せるものに先立って対立には何ものも対立せしめられない」[39)]ところの絶対的な自己関係として所在究明がなされるのである。

> 非ー他なるものによって表示される第一原理はそれ自身を規定し定義する時，その定義する運動において非ー他なるものから非ー他なるものが生起し来る（in eo definitivo motu de non alio non aliud oritur）のである。そして非ー他なるものと生起し出現した非ー他なるものから，規定する定義の活動は非ー他なるものの内に完結されるのである（atque de non alio et non alio exorto in non alio concluditur definitio.）[*De non aliud* (h XIII), c. 5, p. 13, lin. 17–20.] [40)]。

37） Cf. *De non aliud* (h XIII), c. 23, p. 54, lin. 31–p. 55, lin. 2.

38） *De non aliud* (h XIII), c. 5, p. 12, lin. 29–p. 13, lin. 12; *De venatione sapientiae*, c. 14, n. 40, p. 39, lin. 15–16: „Deus igitur trinus et unus est diffinitio se et ominia diffiniens.“ もこの展開可能性を確証してる。

39） *De non aliud* (h XIII), c. 19, p. 47, lin. 10: „Oppositioni enim ante opposite nihil opponitur.“ ; cf. ebd., c.7, p. 16, lin. 25–27; prop. 6.

40） さらに，Cf. *De non aliud* (h XIII), c. 10, p. 23, lin. 20–22: „Unde ‚non-aliud‘ formarum est forma sive — formae forma et speciei species et termini terminus et de omnibus eodem modo sine eo, quod sic ulterius in infinitum sit progressus, cum iam ad infinitum omnia definiens sit perventum.“——（量的規定及び一切の他なるものに無条件に先行する）真の無限（絶対的無限）に「無限の無限」といった相乗する進行があり得ないのと同様に，「非他なるものの非他なるもの」も有り得ない。クザーヌスにおける theologia in circulo の厳密化と超越する否定性とを巡って：Werner Beierwaltes, *Identität und Differenz* (Philosophische Abhandlungen 49), Frankfurt a. M. 1980, S. 145–161.

〈非－他なるもの〉とエニグマ的に表示される絶対原理の動態は，それ自身の自己定義的活動性による自己自身への回帰において，自らに内在的に（＝他性的規定化を超出する）固有な自己関係の動態を顕示する。但しこの自己関係の動態は，超出してゆく否定性としての絶対的原理性格を〈観察者〉に映現せしめる事態であることを，テクストに含蓄された否定性理解の究明へ向けて〈観察者の指針〉に沿って以下に示唆しておきたい。

（三）超越してゆく否定性それ自体

（二）の前半部で明らかにされたように，個別性が立ち現れる存在者の現実はクザーヌスにとって他性の場の開けとして特徴づけられる。他性は神の創造に由来するのではなく，欠如的否定を意味する。この欠如的否定は，凡そ存在するもの――比較可能性と相互の関係性が成り立つ世界現実――に内在的な否定性として理解されるが，存在者は単にそれのみの措定的な現実（positum）であるのではなく，内在的な他性的否定性において自ら以外と対立するもの（oppositum）という根本性格を有する[41)]。他方絶対的なる者は，あらゆる対立的なものに対しての自らの単独的対立性の否定態において自らを示す。その際に絶対者は，何らかの対立するもの（oppositum）も対立するものの相互の対立性も端的に否定するものではない。この根本事態から帰結するのは，‚non-aliud‘ が意味表示するのは欠如的－他性的否定と論理的に等価の否定なのではなく，対立する諸相におけるどのような対立性（＝肯定に対する単純な否定，措定に対する止揚・除去）に対しても超越してゆく否定性であるということである。‚non-aliud‘ の超越してゆく否定性は，上述の思考脈絡からは「他性による存在者内在的な否定性の他性的否定」といった二重性を意味することなく「他性による否定性の非－他性（non-aliud）の否定」として絶対化する否定なのである[42)]。神は，他者性におけるあらゆる差

41）　絶対者（神）は ‚oppositio oppsitorum‘ として互いの下で相対立する存在者（複数）の対立関係自体に対峙するが，他方この絶対的な対峙は対立する存在者（複数）に対しての如何なる対立関係にあるのでもないことは，擬ディオニュシオスが ‚oppositio sine oppositione‘ という表示によって既に観て取っていた。*De non aliud* (h XIII), c. 19, p. 47, lin. 8–10; cf. *De visione Dei* (h VI), c. 13, n. 54, 7–15.

42）　Cf. *De venatione sapientiae* (h XII), c. 14, n. 41, p. 40, lin. 3–6 : „Ideo etsi deus

異の内へと嵌入する非－他者として〈あらゆる他者に於いては（他者の差異性に先立つ）それ自身の絶対的否定動態〉と理解される[43]。『非他なるもの』では，最初の部分であらゆるものの第一原理である神を ‚non-aliud‘ と表示する了解から出発するが[44]，この著作の結末部に総括されている〈『非他なるもの』の徳性についてのテーゼ〉prop. 14–15 における詳論においては，‚non-aliud‘ の否定性が肯定の原理なのであり，肯定概念の意義が変位せしめられて，絶対的な否定動態が〈本来の〉肯定形式としても理解されるべき論理構造が示される[45]。つまり（定義され得るあらゆるものの）第一原理は，肯定の種別的形式による肯定（具体的定義の形式）に対しての単に否定的なものとして派生的に現れ出ることなく，「［他なるものにおいて ‚non-aliud‘ を他なるものとして観る者は］肯定されるものにおいて肯定されないものを肯定されるものとして見る。つまり否定的肯定をこのような肯定の原理として見ているのであって，すなわち止揚された否定的肯定こそが肯定なのである」[46]。超越してゆく否定性は，肯定の《原理》に他ならない。この思考脈絡から ‚non-aliud‘ は，原理機能として本来の措定的－産出的否定性を表示すると考えてよい[47]。*„Tu quis es ‚De principio‘ “* (1459) では，「否定的なものがあらゆる肯定の原理である。原理はすなわち如何なる［原理から発現して］分有化されたものの何ものでも無い。しかし，あらゆる原因づけられたもの

---

nominatur non aliud, quia ipse est non aliud ab alio quocumque — sed propterea non est idem cum aliquo. Sicut enim [deus] non est aliud a caelo, ita non est idem cum caelo.“

43） *De venatione sapientiae* (h XII), c. 13, n. 35, p. 38, lin. 5–10; *De non aliud* (h XIII), c. 5, n. 19, p. 13, lin. 10–12. 絶対者の動性としての〈あらゆる差異の内への嵌入〉は，差異性に対する対立概念としては理解され得ず，差異性と非差異性の対立的差異を超越する絶対性の超絶として理解されねばならない。

44） *De non aliud* (h XIII), c. 2, p. 5, lin. 21–22.

45） *De non aliud* (h XIII), prop. 14, p. 63, lin. 22–25: „et qui Deum videt ante affirmationem et negationem, ille Deum videt in affirmationibus, quae de ipso per nos fiunt, non esse negativam, quae affirmatur, sed affirmationis affirmationem.“

46） *De non aliud* (h XIII), prop. 15, p. 63, lin. 30–32: „[ille videt] ... in affirmato non-affirmatum affirmatum, et videt negativam tale principium affirmationis, quod ea sublata est affirmatio.“

47） unum が根源的原理とされる際も同様に述べられる：*De venatione sapientiae* (h XII), c. 21, n. 61, p. 59, lin. 4–7: „Verum, ut ait Dionysios, « unum quod est, multiplicari dicitur multas ex se producens substantias; manet tamen unum, quod deus, et multiplicatione unus et procedendo coniunctus. »“; *De princ.* (h X/2b), n. 39, lin. 12.

はそのものにおけるよりもその原因においてより真であるのだから，肯定はより高い在り方で否定の内に存する。なぜなら否定はこの事態の原理であるからである」[48]と明言されている。

最終的に，神である第一原理の絶対的に否定的な自己関係性への言及が可能となる。‚non-aliud‘ というエニグマ的表示が他性的否定性（aliud）を超克する絶対的否定態（non）それ自身を第一義的に意味することは，これまでの考究を通して幾重にも開陳された。然るに翻って，絶対的否定態それ自体は原理論的にあらゆる措定／肯定／止揚の〈超越的産出動因〉として，単独に絶対的にそれ自らへの関係である[49]。絶対的否定性の自己再帰おける〈自己性〉が成り立つ原理論的な究極の在り処は，超本質的 - 超実体的（super-substantialis）超越として，擬ディオニュシオスからの否定神学的伝統に則りつつ指示されるのであるが[50]，キリスト教否定神学の動向の内部で否定性の自己関係への思考脈絡が（エックハルトとの相違においても）どのように可能になるかの主題的考究は，稿を改めて問題化したい。但しクザーヌスは，「他なるものに先んじ，他なるものの中にあっては何らかのものに対して他ならざる見る働き」を

48） *De princ.* (h X/2b), n. 34, lin. 7–10: „Negativa igitur principium omnium affirmationum; principium enim nihil est participatorum. Sed cum omne causatum verius sit in sua causa quam in se ipso, igitur affirmatio melius est in negatione, cum nagatio sit eius principium.“; cf. *De venatione sapientiae* (h XII), c. 22, n. 64, p. 62, lin. 7–10. *De docta ignorantia* (h I) の段階では神の自己縮限である世界現実を〈欠如的に無限（privative infinitum）〉と規定し，それは神以外のすべてを包含する限界を欠く無際限性において無限的なるもの（interminatum）であるのに対して，絶対的無限たる神は端的に〈否定的に無限（negative infinitum）〉とのみ呼び得ることが開明されていた（*De docta ignorantia* II, c. 1, n. 97）。絶対的最大性としての神は，「あらゆる可能存在を現実に存在する絶対性」（ebd., III, c. 2, n. 190）とも敷衍して理解されるが，〈否定的に無限〉の〈否定的に〉が神である絶対的原理性の本質として思惟されるのは後期の諸著作を通してである。

49） Cf. Max Rohstock, *Der negative Selbstbezug des Absoluten. Untersuchungen zu Nicolaus Cusanus' Konzept des Nicht-Anderen* (Quellen und Studien zur Philosophie, hrsg. von J. Halfwassen, D. Perler und M. Quante, Bd. 119), Berlin/Boston 2014, besonders S. 61 ff.

50） *De non aliud* (h XIII), c. 4, p. 5, lin. 21–22: „Omnes enim theologi Deum viderunt quid maius esse quam concipi posset, et idcirco ‘supersubstantialem’, ‘supra omne nomen’ et consimilia de ipso affirmarunt, neque aliud per ‘super’, aliud per ‘sine’, aliud per ‘in’, aliud per ‘non’ et per ‘ante’ nobis in Deo expresserunt; nam idem est ipsum esse substantiam supersubstantialem, et substantiam sine subatantia, et substantiam insubstantialem, et substantiam non-substantialem, et substantiam insubstantialem.“; cf. *De princ.* (h X/2b), n. 33, 2–7; *De venatione sapientiae* (h XII), c. 18, n. 52, p. 49, lin. 14–19.

神の視（visio）として，「諸々の観照作用の観照作用（visionum visio）」と表現する[51]。これは《ノエシス的超越》[52]として，〈超越してゆく絶対的否定性〉の力動が何らかの基底的根源に終止することなく，基体化（Hypostatisierung）を許容することなきことを如実に証示していると言えるのである。脱－基体の〈脱〉が超越的否定態自体の究極的原理性格を指し示している。

51） *De non aliud* (h XIII), c. 23, p. 54, lin. 12–17.

52）『一般者の自覚的体系』（1930 年刊行）の時期の西田幾多郎の思索から，西田の立場は現象学の開拓における思惟の問題構制には一貫して批判的でありながら，その独自の動向が〈現象学的〉に根源化する性格を示していることが読み取れる。「ノエシスの方向へ超越するといふことは作用する自己の奥底に超越することである，作用としての自己の奥底へ超越することである。斯く意識有としての作用の意義を脱せないかぎり，現象学の立場に立つことはできない。ノエマとノエシスとの対立を見る純我の立場は，ノエシスのノエシスの立場でなければならぬ，それは作用の作用として構成的意義を有せねばならない」（旧全集版第Ⅴ巻 148 頁）。ノエシス的超越の方向の極限に，すなわち叡智的真実在性の根拠としての叡智的ノエシスの更なる淵源に，宗教的自己の境位が看て取られたことの意義は大きい。